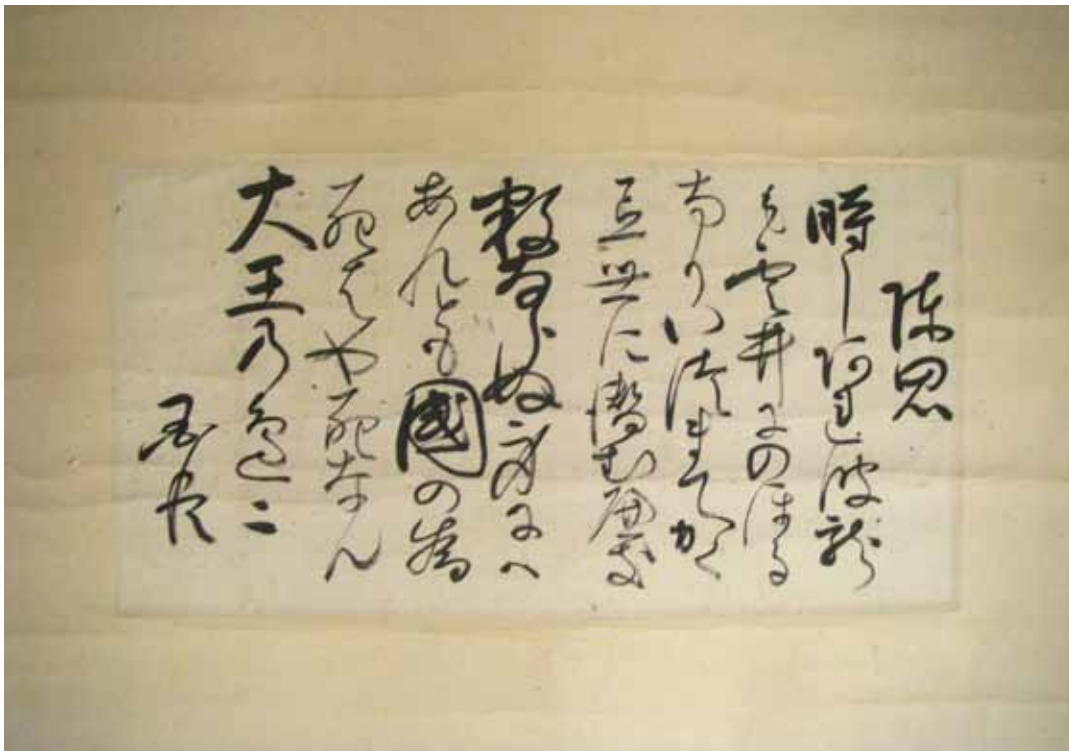


# 太宰府の文化財

(303)

## 維新志士たちの書 — 平野國臣 —

ひらのくにのみ



今年、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」が放映され、何度目かの幕末ブームです。幕末から明治にかけては、日本全国が舞台になっており、自分の生まれ育った場所が維新の舞台になっていることに気付いて驚かれる人もいます。さて、その幕末から明治に

### 陳思

時しあれば龍も雲井にのぼるなり、いつまでかくて世に潜むべき数ならぬ身にはあれども國の為死はや死なん大王の辺に

國臣

### 解釈文

陳思（思いを述べる）  
時期が来れば龍も天上に昇るといふのに、いつまでこのように世にかくれているのだからか  
とるに足りない自分ではあるが、お国のためには死んでもかまわない  
天皇のそばで

國臣

かけての激動時代に、皆さんが住んでいるここ太宰府も、維新の舞台になったことをご存じでしょうか。「太宰府の文化財」280号で紹介した松屋にその証拠の一つが残されています。幕末に松屋の主だった栗原孫兵衛は、福岡、長州、薩摩の志士と広く交わり、尊皇攘夷運動を支援していました。そのため松屋にはさまざまな人々の出入りがあったと伝えられています。例えば、平野國臣（福岡藩）、月照上人（京都清水寺）、野村望東尼（福岡）、平野五岳（日田専念寺）、西郷隆盛（薩摩藩）、大久保利通（薩摩藩）等です。

今回紹介する維新志士の書は、平野國臣が松屋に残したものです。平野國臣は福岡県出身で、文政11年（1828年）5月12日生れで、元治元年（1864年）8月21日に死去しました。元福岡藩士で、攘夷派志士として奔走し、西郷隆盛ら薩摩藩士と親交を持ち、討幕論を広めました。京都から追われた月照を薩摩まで送り届けるため尽力しまし

たが、後に、禁門の変の際に生じた火災を口実に殺害されました。彼の歌としては、薩摩藩に潜入した後、藩に倒幕の機運を高めようとしたが、上手く行かず退去させられた際に詠んだ「我胸の燃ゆる思いにくらぶれば、烟はうすし櫻島山」が有名です。実は國臣は太宰府と縁が深く、18歳の頃、福岡藩の普請方手附（土木営繕）の任命を受けて、台風で壊れた太宰府天満宮の楼門の修理にあたっています。青年期に4カ月程度とはいえず、学問の神菅原道真のお膝元である太宰府で過ごしたことは、後に有職故実の研究者としても著名になる國臣の礎になったことでしょう。以後、國臣は人生の岐路には必ず天満宮に参拝しました。この松屋に残された國臣の書の内容としては、維新を目指すがなかなか上手く行かず、雌伏している自身の有様を込めて表しており、勢いのある筆跡からその人となりが伝わってくるようです。

文化財課 高橋 学